

東洋文庫所蔵 維摩会并東寺灌頂記(抄)

歴史研究室・古文書

本書は広橋家旧蔵本で、「岩崎文庫和漢書目録」にも載せられており、特に新資料というものでもない。その内容は美術史、建築史に関する興味ある資料を含んでいるが、冥間にしてこれを利用した研究のあることを知らない。そこで紙数の関係から特に重要と思われる養和元年10月の部分のみを選んで、ここに抄録紹介したい。

本書は日野兼光の日記の維摩会部類記で、巻末には承安元年12月25日の東寺灌頂についての兼光記を合せ抄録している。その筆者は外題にもあるように、兼光の孫で民経記の作者たる広橋経光と考えられる。その体裁は卷子本で、書状の紙背を用いて書かれている。巻首は少々欠けており、現存巻頭の記の年月日は詳かでないが、講師暨義の名から安元2年10月と考えられる。以下治承元年より文治2年に至る毎年および建久元年の各10月の維摩会に関する記事を集めてある。この中でも特に養和元年10月の部は記事が詳細で、特に建築・仏像については極めて具体的に記されており、内容のにも興味深いものがある。治承4年12月、平氏の南部焼討により興福寺は大部分が灰燼に帰したが、翌養和元年6月15日、造興福寺司が置かれ、復興造営も緒につくことになった。この時造興福寺長官に任ぜられたのが日野兼光その人である。養和元年10月の記事が特に詳しいのはこうした関係にもよるものであろう。

東洋文庫所蔵維摩会并東寺灌頂記抄

本書はお茶の水国書館所蔵「養和元年記」と共に平氏の焼討後の興福寺復興造営を知る上で極めて貴重な史料である。

(前略)

養和元年十月八日辛亥、参殿下、以權弁被下大会文書等、宣旨聴衆權弁書之、籠礼紙内如何、先々挿結緒敷、頭弁参会、暫談雜事、及晚退下、幡花鬘等以下大会仏具等、臨眺可被送南都云々

九日壬子、依日次不快、曉鐘以前出京、有勞事所用小舟也、刻許下着勅使房、依未作出、明日可移住之由、修理法橋禪慶示送、仍借請寺僧小房寄宿、寺家并宿院司、任

例供給、今年当国兵旱兩難之上、造寺宿院之管無他事之間、每事省略、主典威言同所召具也、

十日癸丑、早旦以主典威言、令巡檢食堂以下所々飯屋門築垣勅使房等、注文在奥、午刻、勅使房鋪設裝束了之由、

自寺家告送、勅着衣冠給食参向、入東御門此御門大路造裝束、但未書長、如勅使房門等未作、着客第座、就旧跡、立五間四面板葺屋一字、鋪設裝束如前々、仍委不記、午刻許、別当法印

相具綱所三人、令渡客房給、威儀師善勝、從儀師教経、春経等、先候于弘庇座、次子蓋冠自北面弘庇方参

別当家礼儀

着、先居有官座程、随御目居并座端、須出妻戸着并

座也、然而依存家礼用此儀、次任例被補闕、請綱所等、

依召昇長押上着座、予先披文書、取綱所先卷、下綱所、次

下十聽衆文、次下堅義長者宣二枚、并年分度者文、

被宣旨聽者式補闕事書、書樣帶、  
但書藏造寺授字、  
次披宣旨聽衆書下文、仰注

記、從儀師令補僧正故障替、次綱所退下、皆悉可補闕也、然而

依可及數剋、兩三人之後、於閑所補之近例也、法印被仰云、

食堂以下如形出來了、可云希有、金峯山僧都蜂起之由、

有三座不參聽衆、  
有其聞、尤以不便、又大念剋限可忿行、三座不參聽衆、

必可補其闕之由、被仰綱所、其後令掃給、予下立西庭、今日礼儀、

禪門勅使御時、故伊豆僧正令渡給例也、申剋、微雨頻灑、綱所

催遲引之間、無左右參上東帶御、暫徘徊食堂東檐之處、

余雷頻灑、似無便宜、仍入堂中且巡礼、御仏并堂壯嚴幡

花鬘高座床仏供行香机以下仏具等講堂料、長者殿令

調儲給、而彼堂遲引、仍昨日先被奉渡、每事尽善、不可記

尽、錦幡飄風、珠蓋堂露、御仏阿弥陀仏<sub>奉定院本仏、頼助</sub>

御仏事  
觀音勢至<sub>借用任生院、強非聖殿、</sub>四天<sub>禪定院、頼助奉當之時、講</sub>

可用此天等、二三寸法、云其内多門、天驗給、淨名文珠<sub>(今度長者殿令奉</sub>

相好不違云々、去四日祝雅明臣於長者殿御使下向次與、被奉居御仏等、此中新仏寺家  
御経願宗圖願先例事、頼室開眼永承金堂例也

御経、殿下新写、令奉渡給、其外莊嚴一如例年、仍委不

記、秉燭之後、別当法印、権別当僧都、覚意、僧都範文、

法眼雅縁、律師常範、法橋勝詮、惠範以下、就上階飯屋、

雨儀

次左右相分參進、衆僧前左右有官右上官、依雨儀、経壇上、  
其後儀只如例、仍略之、講師覚尊、問者東大寺已講朝座  
了退下、及深更始夕座、天晴月明、夕座儀如常探題別当  
法印、精義東大寺理真已講、堅者寺寺尋晚、曉鐘以後

事了退下、堅者存例來臨、

講堂九尊外、食堂暫中銀仏、奉籠障子帳中、奉安

食堂東第三間云々、御前供、大仏供等、試経日料也、康平

康和等例如此、食堂本仏千手觀音、雖被奉始、

未奉終其功之上、康平例、不奉居食堂本仏、仍今

度不忘沙汰、食堂雖半作、此会猶留当寺、隨喜之

涙時雨不休、

別当法印令任一乘院給、如形屋兩三字、被造立云々、

今日幸範律師來談造寺并大会可被行事等慶、

又上座法橋進慶來、國々庄園会料米遲引之由、所令

歡語也、

注進

興福寺内雜摩会料新造并焼殘堂房舍等事

合

一新造

食堂一字<sub>七間四面、飯葺</sub>

講師房<sub>中室階南端立之</sub>

五間二面飯屋一字<sub>佛北行</sub>

七間一面飯屋一字<sub>東西行</sub>

上階馬道代<sub>食堂後立之</sub>

五間 二面仮屋一字

二間仮屋一字代發

勅使房 本設立之

五間 四面仮屋一字

四間仮屋一字

南政所

庁屋 一字五間 二面本設立之

維摩會雜役屋等廿五間

鐘樓一基 二階仮舞臺丹壁等 但相違先例可法云々

北政所

有官宿房本設立之

五間 仮屋一字

諸門

東御門 半作未舞瓦 不立師

西御門 遊軍但不立 扉不塗丹

東院 四足 不立扉瓦

一乘院

五間 二面 檢皮屋一字

四間 一面 檢皮屋一字

四足 一字

一私造宮

松院內 六間 三面房一字 大法師 覺者

六間 二面 一字 印書

角院內 六間 三面房一字 西金堂 大師

四間 三面房一字 法房 宗善

寤院內 四間 三面房一字 西金堂 象養祖

伝法院內 四間 二面房一字 覺取

東洋文庫所藏維摩會并東寺灌頂記抄

喜多院內 二間 一面 堂二字

五間 三面房 一字

已上大法師義詮

西院內 五間 二面房 一字 西金堂 寂慶心

瑠璃房 三間 二面房 一字 覺智

一 燒残

松院內 五間 四面房 一字 四間 三面 兼舍 一字

已上奉取出西金堂觀音本師覺宗房也

尊教院 五間 二面房 一字 西金堂 本師相全

右注進如件、

養和元年十月十三日 主典右衛門少志中厂威言

十一日甲寅、吉野惡僧可乱入国内云々、仍僧綱以下、参進

禪定院群儀云々、申剋始朝座、範玄、勝詮不着座、夕座

戊剋始行、别当法印探題給堅者範慶、一問理真及五

重、晝鐘事了、堅者来、今日雅縁法眼来、

十二日乙卯、早旦参東大寺、奉礼大仏、悲涙霑襟、非言之所

及、申剋始朝座、雅縁法眼以下夕座如例、堅者長分前円長分前

他寺堅者不来事 請定云々 探題精義如日来、堅者不来、若依他寺之

分敷、

十三日丙辰、向円宗慶房沐浴、朝座稱朝当以下事了、参一

乘院、令出逢給、数剋談雜事、給夕座如例、一問東大寺堅者

者東大寺探題法印御房、云表白、云精義、甚以優美也、

雖受貴種、未必兼、材幹雖富才名、未又兼、所仰之天骨、

誠は法相一点之証也、可貴々々、乘慶聊有表白、御表白

夫維尸大会者、国家第一之御願、我寺嚴重之勝事也、

々々々已余于五百歳、々々々全滿于四十代、

爰去冬、堂椿僧房仏像經典、盛為灰燼<sup>成</sup>、聞之者、皆拭

紅淚、況於一寺之諸德兮、見之者、各勞丹心、況於小

僧之微情兮、僅殘經卷、憂情切以不提拏、乃適

留章疏、落淚深以不鑽仰、然而悅旧風之興行、

愍定今日之得略許也、

向信宗已講房

十四日丁巳、早旦向信宗已講房、令小浴、其次多武峯善範筆

不空羅索一鋪、奉迎之、申剋着朝座、法眼雅縁以下

参会、夕座堅者<sup>東大寺</sup>、探題如去夜、一問隆英已講、

五重二間、三重三間、三重四間、二重五間、一重到三間、精義

如此之間、鷄鳴事了、御月忌問事、宗<sup>來</sup>所注送也、

次郎冠者、只今所帰来候也、

今度大会、無事被遂行候、偏御一身之冥加之由、令存候、

吉野無為之柔、又以為悅、紀伊国追討使下向、相尋早可申

南都之由、度々申助頼之許了、此辺<sup>ハ</sup>定説不承得候之故也

抑一乘院番論義、勅使座<sup>ハ</sup>母屋の東第一間ニ横敷之

西面也、如然事、一事已上可令随寺家所為給、不似京都事

候歟、信僧正御時、存宗礼執盃令献了、頼不可然之由候し

かとも、勅使房にてハ不可候歟、彼御時ハ渡勅使房給

之時、令退帰給云々、今度ハ下立砌之様ニ寛候、

自妻尸も、不出入之様ニ寛候也、何様ニも今度

事、以無為可為先歟、

不例人、自昨日為減、昨今ハ殊宜令坐給云々、神妙候、御

上洛在近、掃洛<sup>ハ</sup>令渡給事、不可然、今ハ大乘会以後、心閉<sup>ニ</sup>

可令人給、

真如院法眼<sup>証</sup>叙法印、

以上威可為辭退所職之由、自京今日所注遣候也、其外

別事不候歟、不具謹言、

十月十四日戌時

々々

十五日戊午、早旦、当講寛尊来、相具座具等、予出逢会

積午一点共事具之参由、参堂別当法印以下数輩参入、

次第如恒、暫徘徊奉齋、即催夕座、依無豎義日也、恒例

如此、次夕座事了、向試經所、其儀如承德中右記儀、但食堂

前当東第二間前庭、立三丈幟一字<sup>在</sup>、其内東西立

屏風敷弘筵、其上敷高麗帖、一如金堂前庭、前西南二面

引二色幔、其後法印令着東西座給、予又着西面座、

次試經議如恒、仍不委記、証師打警、先々綱所可打之由、

五師下知太不当事也、入夜番論義事相具了、可参向之由、

以中綱被示遣、仍着束帯参向共待口取松明御行并夜同以前行、

出勅使房門、西行人自一乘院南門<sup>新造</sup>、北行昇子午廊

南庇、西面階入南面戸、北行着南面座小扞、

北第一間戸前<sup>母屋</sup>、南面敷高麗帖一枚、并丹座、為弁

座、其前居儀如例、同第一間、西面敷座為别当以下僧綱

已講座、同第五間西簀子構飯床、為有官別當座、南弘  
庇敷論匠座西上、以上座、各居饌庭上、举篝火、寺  
職掌等着褐衣冠、奉仕之、聽聞頭裏濟々焉、但比  
先例十一也、

先是權別當僧都覺憲、範文、法眼雅緣、已講乘慶

等、着座論匠、又然、次別當法印着座給、予聊動座、僧徒  
皆如此、次六位別當着座、次一獻、予雖請口、為恒例可取  
孟之由、有別當御命、予聽取之、起座奉擬別當、從僧等  
二獻別當取上給事  
被送、次第巡流、有官別當用別坏、次二獻別當、三獻

予奉擬法印如前、次已講乘慶、立切燈台、置紙筆、  
即書結文覽、別當法印僧綱次第見下、次乘慶表白

其別當之前、次召論匠覺要大法師、答尋曉大法師  
問者通者四座次々三通問答了、最末僧捧菊枝教化、  
二枚於前座

次法印、令起座給、予又退下、

今夜奉致家礼、於法印之議、皆逐保元年中權門

為勅使、奉致信定法務之例也、雖入仏室大廳之種族、  
爭類凡俗哉、其後以使者示賜云、寺僧綱以下、欲申造

寺、早可被終事、可申入者、早可令申上之由、令參申了、  
緊義修善事、明年研学堅義事、被下、長者宣、權升奉行也、予書

請文進之、又下知寺家了、年月以下皆書別當字、  
所々御布施等、今日被下遣云々、

新造淨名文珠、予密々奉礼之、相好端嚴、丹青太美、  
始如対真容、尤以珍重、

東洋文庫所藏維摩會并東寺灌頂記抄

予私相語給法師、奉書始三登山并南門堂形像、為本  
為本尊等三等山等形像、  
尊常為奉、瞻礼也、

十六日己未、別色之間、仰院別當、令打衆會鐘、日出之後參上、  
日出後參上事、  
於上階代砌、衆僧列參進儀如恒別當法印、權別當僧都、聖緣法師、  
法橋勝詮、惠範、

其後予向講師房三拜刃手、氏人盛長、有官別當等相隨、  
向講師房、  
向供食所、  
細殿等、

講師等、稱之細殿等、次有供食事、其儀細殿旧跡、  
立七丈一字、為其所、件間議又如例、申剋事了、退下勅使房、  
改衣裳、此間憲清寺主為法印、御使來臨、講師付論義二卷、  
付後卷等、

綱所付後卷、三通有官付氏人見參、其後逐電掃落、所用  
偏舟也、亥剋着鳥羽之間、南海征討使為盛朝臣下向、予

於西川原方遊誘令過敷、深更婦宅、予大会勸使  
勤仕由、以六ヶ度也、而相逢堂舍灰燼之時、雖失面目、  
適挑法燈之一点、更達齋席之中興、是又非無小緣乎、

十七日庚申、參殿下、進後卷、被仰云、後卷試經堅義  
持參院等事、

文可奏聞、氏人見參、可給外記者、僧綱等、細殿等、  
講師論義等、留御所、其外申々事、又參旧院、謁通業

井公胤等、懷旧之淚、追時無記、以當講靜殿、可補阿弥陀  
堂供僧之由、被仰下、其理相当、尤以可然、

(後略)

(田中 檢)